

第4章

独立期マラヤにおける国語論

《植民政策学》において表明されてきた「マレー的なものの喪失」への危機をみずからのものとするをとおして、醸成されてきた「現地」のマレー語研究は、第二次世界大戦後にマラヤの独立が現実味を帯びてくると、「国語」問題として新しく展開する。しかしながらそこでは、これまでとはまったく異なる問題がもちあがってきた。ウィルキンソンが『マレー研究論集』においてみてきたように、マラヤは大多数の「マレー人」と少数の「アボリジニ」からなるのではなく、「中国人」や「インド人」などの「移民」集団をもふくめた《ブルーラル・ソサエティ》であるとみなされるようになるのである。まずは順をおって見てみよう。

19世紀の半ばにアブドゥッラーが考えた「マレー的なもの」は、本来的な過去と必然的にむすびついたものというよりも、可変的な未来へ向かって新しく作りだすものであった。そのさい、「マレー的なもの」の空間的なひろがり、あらかじめ決定されているわけではなく、マレー語を学ぶことによって作りだされ、交易のネットワークとともにさまざまにひろがり変化するのである。しかしながらイギリスによる植民地統治が領域的な支配によって進展していた20世紀のはじめには、アブドゥッラーとは異なる考えが表明されるようになった。「マレー的なものの喪失」への危機意識という点においてはアブドゥッラーと考えを共有するものの、ザッバは、本来的な過去との必然的で内的なむすびつき——ムラユ・ジャティであること——により力点をおこうとする。ザッバの構想からはアブドゥッラーのような「移民」の子孫は排除された。本来的な過去とのむすびつきという点から、ザッバは「マレー的なもの」の空間的なひろがり、イギリスの植民地の領域であるマレー半島ではなく、19世紀はじめの研究者たちが見渡したより広い地域に見たのである。

しかしながら、戦後にもちあがった「国語」問題は、「マレー的なもの」を「国

家」の枠組みのなかで構想することを強要するようになったのである。その「国家」的な枠組みは、《植民政策学》のなかで次第に意味をもつようになってきたマレー半島という空間概念であり、《地域研究》によって可視化された《プルーラル・ソサエティ》である。民族的なものとして構想されるもののひろがりや国家的なひろがりを重ねあわせるためには、空間をかぎられたものとして意識することのないアブドゥッラーの構想でも、植民地の領域を超越するザッバの構想でもない、新しい構想が必要になった。

《地域研究》の時代とともに成立する《プルーラル・ソサエティ》という見方については、第6章以降でくわしくみていくことにして、ここでは、独立期におけるマレー人の保守層による国語にかんする議論を検討する。《植民政策学》のなかで醸成された基本的な視点と《地域研究》的な視点の交わりと重なりと絡みあいのなかであって、「現地的なもの」が、いまや領土と一体となった「国民」をはっきりと意識して新しくつくりだされる。

第1節 独立以前の国語論

1 道具としてのマレー語

独立直前のマラヤでは、「マレー語」が独立マラヤの国民語となるという合意がある程度まで達成されていた¹⁾。1954年マラヤ連邦立法議会において、マレー半島における国民語を「マレー語」とする決定がなされた。1955年の総選挙で与党となった連盟党（マレー系中心の政党UMNO、中華系中心の政党MCA、インド系中心の政党MICなどからなる）は、「総選挙のための声明文」において、「マレー語」をこの国の国民語として採用することを連盟党の目標に掲げていた。1956年8月には当時の教育大臣ラザクにより「教育委員会報告書」（通称「ラザク・レポート」）が提出され、「文化・社会・経済・政治の分野において一つの国民としてマラヤの

¹⁾マラヤにおける言語政策や国民語にかんする議論については、M. Roff (1967)、Asmah (1974, 1976, 1984)、Ismail Hussein (1984)、Mohd. Taib Osman (1986[1961])などを参照のこと。

住民の希望を満たすための国民教育の方針」(Razak Report 1956:1)が提案された。ラザク・レポートによる国民教育の方針は、「マレー語」を国民語 bahasa kebangsaan としたうえで、この国にすむ他の「諸民族 lain lain bangsa」の言語と文化を守るという目標をともなっていた。レポートからもわかるように、マラヤはさまざまな「民族」からなる「社会」としてみなされるようになったのである。

マラヤ独立の1年前である1956年9月に開催された第3回マレー言語文学会議 Kongres III Bahasa dan Persuratan Melayu Malaya において、マレー語文学者のグループである Angkatan Sasterawan '50 (ASAS'50)は国民統合のために国民語が必要であることを以下のように述べている²⁾。

ASAS'50の闘いは、マレー語とマレー文学の賛美者による闘いである。これは、独立達成には国民的 kebangsaan 統一が必要であるという政治的社会的意識によって推進されている。独立は社会正義、国民 bangsa の発展、人類の平和への架け橋である。ASAS'50はその成立以来、言語と文学が独立への国民的統一の道具であり、国民の思想を社会正義、発展、平和という希望とともに進展させる道具であるという信念のもとに活動してきた。(Keris Mas & Usman Awang 1987:27)

マーガレット・ロフも指摘するように、当時「マレー語」をマラヤの国民語にすることにはおおむね同意がえられていたというが、これにたいする否定的な見解がまったくなかったというわけではなかった(M. Roff 1967:316)。ASAS'50は先のラザク・レポートが提出された後すぐに、このレポートが「マレー語」を国民語とするのにじゅうぶんな方針を示していないことを批判し、独立後10年で「マレー語」を国民語とする希望を保証しておらず、英語の地位が強固となる結果をまねくと危惧を表明している(Kamaludin Keris Mas, Mohd. Ariff Ahmad, & Asraf 1987:21-22)。ここから国語としてのマレー語にたいする仮想敵が英語であったことがわかる。また、

²⁾以後ASAS'50と略記。

ASAS'50のメンバーによって独立以前に書かれた以下の文章からも、英語を推進する人々の存在が示唆されている。

言語問題の解決には、この国のおおのの民族が民主主義のプロセスに参加する権利を承認することが必要であり、個々において一つの言語がリング・フランカとして発展し、民族同士の伝達の道具となる。このリング・フランカはマラヤの民族の言葉から選ばれ、この国の人民の多くの人に理解されねばならない。英語はその条件を満たしていない。〔中略〕さまざまな民族のあいだの伝達の言葉でもっとも多くの人々が話せるのはマレー語である。

("Memorandum Kepada Suruhanjaya Perlembagaan Rendel" 1987:6-7)

この文章からは、マラヤが複数の「民族」から構成されていることが一般的な事実として受け入れられていることがわかる。それを認めただけで「マレー語」が国語になるのにふさわしいことを説明する論理が展開されることになる。だがそれは予想外に困難な問題であった。複数の諸「民族」の「民族語」をさしおいて、「マレー語」を国語とすることを納得させるだけでなく、複数の諸「民族」のいずれにとっても「母語」ではない「英語」という候補をおさえこまなければならないからである。ASAS'50の説得は成功しているとはいいがたいかもしれない。それというのもリング・フランカが、なぜマラヤを構成する「民族」のうちの一つから選ばなければならないのかについて有効な説明をすることができていないからである。ここには、20世紀の初めとは異なる新しい苦悩が持ちあがっている。その苦悩の種とは、《プルーラル・ソサエティ》マラヤである。ASAS'50は《プルーラル・ソサエティ》という状況を認知したうえで、「マレー民族」にとつてのだけでなく、他の諸「民族」にとつての「マレー語」の地位を新しく考えださなければならなかった。

「マレー語」の国民語化にたいして否定的な態度をとる人々の意見には二つの方向性がある。一つの方角性は、その当時の「マレー語」の状態にかんするものである。「マレー語」の国民語化を推進するASAS'50によつても、「マレー語」の国際的な地位が低いこと、近代的で高度な知を伝達する段階にいたっていないこと、な

どが指摘されていた。じじつその当時のマラヤでは「マレー語」での高等教育は一般的ではなく、「マレー語」には近代的な知を伝達する資質がないと考える人々も多数存在したのである。これは「英語」を推進しようという理由の一つである。

もう一つの方向性は、「マレー語」が「マレー人」の「民族語」であるということに力点をおいたものである。おのおの「移民社会」からは、みずからの文化と遺産を存続したいと強力に要求されつづけ、「マレー語」の国民語化によって、「マレー人」以外の人々の文化や社会が、「マレー」文化や社会へ同化させられ消滅してしまう不安が呼び起こされた。これらの人々が《プルーラル・ソサエティ》的状况を超克してめざそうとするのは、今でいう多文化主義的な国民国家であるといえよう。これらの人々は、「マレー語」の国民語化が「マレー文化」への同化をもたらし、それによって「単一の民族」からなる国民国家がめざされていることにたいして恐れをいだいたのである。そこでこれらの人々は、「中国」系の住民を中心に「中国語」などの「非マレー人」の「民族語」をもマラヤの公用語とすることを要求するようになる(Roff 1967:318)。ただし、ロフによれば「中国語」の公用語化の要求は、「マレー語」を国民語とすることに同意したうえでなされており、「英語」を「価値中立的な言語」と考えて各民族を媒介する国民語とするということをともなっていたわけではなかった(M. Roff 1967:318)。

「マレー語」の国民語化を推進する立場のASAS'50が編みだしたのは、「英語」が植民地宗主国「イギリス」の言語であり、植民地政府とむすびついたエリートの言葉で、マラヤに居住する多くの人々の共通言語にはなりえないという「英語」批判の論法であった。そこでASAS'50は、国民語が外来語ではなく、少なくともマラヤのいずれかの「民族」の「民族語」に由来すべきであり、なかでもマラヤの住民の多くが話すことのできる「マレー語」こそが国民語の地位にふさわしいと主張した。しかしながら、「マレー語」が「マレー民族」のみを代表するようであっては、「マレー語」の国民語化が「非マレー民族」の「マレー民族」への同化と同一視されることになる。そこでASAS'50は、「マレー語」が「マレー民族」の魂や精神を体現しているというようなスローガンを注意深くさける。かわりに強調されるのは、「マレー語」が国民統合のための道具として、意思の伝達の道具として、いかに適切で優れているかであり、現在じゅうぶんでなくてもいかに変革の可能性があるか

ということであった。上でも記したように、ASAS'50にとって言語や文学は「民族同士の伝達の道具」、「国民的統一の道具」であり、「国民の思想を社会正義、発展、平和という希望とともに進展させる道具」である。このようにASAS'50の国民語論では、「マレー人」のための「マレー語」という表現を回避しようとする試みがなされている。

しかしながら、「マレー民族」と「マレー語」を有機的にむすびつけるような、過去への回帰の志向がまったく認められなかったということはない。

2 過去への回帰

栄光の過去への回帰の志向は、「マレー語」を整備して国民語にふさわしい言語にしようとする実践においてみることができる。その一つとして、ローマ字つづりの採用に端を発した、スタンダードな「マレー語」を探求しようという試みがあげられるだろう。「マレー語」にはアラビア文字によるもの(ジャウィ)とローマ字によるものの二つの表記法がある。第3回マレー言語文学会議において、アスラフとウスマン・アワンは、発音どおりの表記をめざすならば、「マレー語」の表記にはアラビア文字より母音の数の多いローマ字の方が適していると報告した(Asraf & Usman 1987:10~20)。このような理由から、第3回マレー言語文学会議は、ローマ字による表記法を公式の表記法として採用することを提言した。

だが、いったいいかなる発音が表記にふさわしい正しい発音なのだろうか。この問いへの一般的な答えとしてあげられるのは、16世紀のマラッカ王国時代の「マレー語」の発音である。もちろん、16世紀の発音などだれも知ることはできない。そのために、マラッカ王国の継承者である古ジョホール王国のあった、リアウ・ジョホールにおける発音こそが「マレー語」の正しい発音であるといわれてきた。1950年代において使用されていた二つのローマ字による表記法(インドネシアのOphuysen Soewandi方式とマラヤのウィルキンソン方式もしくは教育つづり方式 Sekolah Ejaan)は、両方ともリアウ・ジョホール地方の発音にもとづいて作成されたという(Asraf 1987:89)。さらに、1950年代において標準とされたインドネシアの政府系ラジオ局 Radio Publik Indonesia のアナウンサーの発音は、このローマ字によるつづり

を正確に再生したものであった(Asraf & Usman 1987:95)。

しかしながら、アスラフによれば、1950年代当時のリアウ・ジョホール方言は、正しいといわれる発音、すなわちつづりどおりの発音とは異なっていた。かれの報告では、マレー半島で話される「マレー語」を発音によって七つの方言に分類し、それにインドネシアのミナンカバウ地方とジャカルタをくわえて、つづりと比較した結果、つづりどおりに発音する地域は存在しなかった。すなわちリアウ・ジョホール地域においてさえ「本来のマレー語」の発音が消滅しており、マラッカ王国時代の本来的な「マレー語」の発音が残されているのは、ローマ字のつづりのなかだけであるというのである。それゆえ、アスラフによれば、「マレー語」の発音が統一されるには、人々がローマ字のつづりどおりの発音を心がける必要があるのである。言いかえれば、ローマ字のつづりどおりの発音を心がけることによって、国民語としての「マレー語」は、酒井直樹のことばを借りれば「未来へ向かって制作されなければならないものとして構想」され、「そうして投射された未来の目標へと至る軌跡は、喪失された本来性への回帰」の過程として構想されているのである(酒井 1996:206)。

3 コスモポリタンな過去の創出

「マレー語」をマラヤの諸民族の国民語としようということにおいても、たしかに「マレー人」の均質な共同体という過去への回帰の志向は完全に消されているわけではなかった。だが、新しいかたちの過去を想起しようという試みも存在した。それは、「マレー語」が「マレー人」の民族語であっただけでなく、かつてマレー諸島における共通の「リング・フランカ」であったというものである。以下はASAS'50のメンバーによる第3回マレー言語文学会議における報告からの引用である。

マレー王国時代にはマレー語は発展をし、マレー諸島とその周辺において使用され、思想的に高度なことを表現できる言語であった。西洋の到来が平和を揺るがしたが、植民地時代においてもマレー社会と言語は一定の進展をし

ていた。だが、新しい発展の達成はなかった。マレー語は文法構造がしっかりとしているので、外国語の影響のもとにあっても抹殺されることはなかった。〔中略〕イギリス人、中国人、タミル人の到来により単一民族社会はプルーラル・ソサエティ *masyarakat majmuk* へと変貌を遂げたのであるが、第二次世界大戦が終わってはじめて民族 *bangsa* の統一と言語の統一の夢を語るができるようになった。日常的にはさまざまな言葉をしゃべっても、人々はマレー語の重要性を意識しはじめてきた。もちろんマレー語を使用しない人も多数いる。これを強制することはできないからだが。言語の統一とは、マラヤとインドネシアにとっての成果であるだけでなく、栄光の過去を再現することになる。(Abdullah & Masuri 1987:41-46)

上の文章によると、「マレー語」はマラッカ王国の言語であるだけでなく、マレー諸島地域における国際語の役割を果たした高度に発達した言語であった。その意味で、「マレー語」を現在のマラヤにおいて国民語とすることは、かつての「マレー語」の地位をとりもどすことであり、外国貿易によって栄えた植民地時代以前の栄光を復活させることなのである。

このようにASAS'50にとって、《プルーラル・ソサエティ》を脱して国民統合をするということは、マラヤに居住するばらばらの諸民族が統合して、新しい国民となることであった。そこで、新しい国民の国民語としての「マレー語」は、過去における均質で統一された「マレー人共同体」の言語としてよりもむしろ、「コスモポリタンなマレー世界」において高度に発達した「リング・フランカ」として想像されることとなった。

第2節 独立後の国語論

1 精神としての国民語

言語書籍局 Dewan Bahasa dan Pustakaは、「マレー語」を国民語として発展させるためのプロジェクトを実施したり、調査研究ならびに出版をおこなう機関として設立された。その言語書籍局の雑誌『デワン・バハッサ』は、マラヤ独立の1957年9月に創刊され、以降「マレー語」や「マレー文学」にかんする論考の主要な発表場所として機能している。

1957年から1958年の『デワン・バハッサ』誌においても、基本的にはASAS'50と同様に、国民語をとおしてばらばらの諸「民族」が統合して新しい一つの国民となるという構想が語られた。「われわれが直面しているのは以下のことである。マレー語が国民語となり、これによってさまざまな民族 kaum からなるわれわれを束ね、一つの国民 bangsa となることである("Rencana Pengarang" April 1958: 121)」。また、マレー諸島とマレー半島におけるリング・フランカとしての「マレー語」の過去も思いおこされ、そのことは、「マレー語」がマラヤの国民語として適切であることの理由となっている。「マレー語が国民語となる権利を有しているのは疑いようがない。というのも、マレー語は何世紀にもわたってマレー諸島におけるリング・フランカであり、すべての民族集団 kaum によって使用されているからである」("Dari Meja Pengarah" Jun 1958:269)。さらに、今日の《プルーラル・ソサエティ》の諸民族のあいだでもマレー語はもっとも主要な伝達語、諸民族のリング・フランカとなっているからである("Rencana Pengarang" Mei 1958: 218)。

先にも述べたように、ASAS'50は言語を国民統合のための「道具」として強調し、「マレー語」と「マレー人」との有機的なつながりを示唆するような「魂」や「精神」のような言葉を注意深く避けていた。しかしながら、独立を達成した後に出版された雑誌『デワン・バハッサ』では、言語は国民の精神や生命と結びつけられて論じられることが多くなっている。それはたとえば「言語は国民の精神 Bahasa Jiwa Bangsa 」という言語書籍局のスローガンにおいてもみられるように、「雑誌『デワン・バハッサ』は、「言語は国民の精神」を達成するための道具である」(Syed 1957:7)というように、今や道具であるのは雑誌のほうである。

独立前のASAS '50 の論考においては避けられていた「精神」の強調が、『デワン・バハッサ』誌で主張されるのは、英語の地位を意識したものであろう。ASAS'50がこれまでいってきたように言語が国民の統合のための道具であるならば、なにもマレー語にこだわらなくてもいい、ということになる。そこで、たんなる便利で優秀な道具としての英語にたいして、マレー語は道具以上のもの、国民の精神を体現する可能性があるとして主張することになるのである。以下は、『デワン・バハッサ』誌の編集記に寄せられた文章の一部である。

一つの国民 bangsa として発展するには諸道具が必要であり、言語はそのうちの一つである。発展のための知識を獲得するために言語は道具として必要である。なかでも英語は、世界で認められた言語であり、イギリス植民地において使用されていた。しかしながら、深く考えれば明らかなことであるが、真実の敬愛はわれわれ自身のうちにあるはずで、道具にはないのである。その意味で、英語はたんなる道具である。それにたいして国民語とはわれわれの個性 pribadi である。国民語が[国民の]個性であることは世界中で認識されていることである("Rencana Pengarang" Jun 1958:271)。

国民語はたんなる道具であってはならない。国民語は国民という有機的な身体に宿る精神でなければならない。だが、マラヤにおいて国民という身体はあらかじめ与えられているものではない。《プルーラル・ソサエティ》状況たるマラヤにおいて国民は欠如しているのである。その欠如は、植民地主義的支配によってもたらされ、独立を達成したとしても、植民地主義によってもたらされた破壊の跡はすぐに修復されるわけではないと考えられている。

植民地化された民族にとって、独立は大きな意味を持つ。植民地主義は侮辱を、独立は高貴をあたえる。植民地の結果を破壊するのは、独立が達成されたあとも長く続く、重い責務である。このことはすべての分野でおこなわれなければならない。というのも、植民地支配はすべての面においておこなわれたからだ。("Rencana Pengarang" September 1957:9)

植民地主義は民族的なものを、博物館に保存するための過去の死者の遺物としてしまった。以下の『デワン・バハッサ』創刊号の編集記は、植民地主義的支配が民族的なものの固有性を弱体化させ、損傷をあたえたことを指摘している。

植民地支配によってわれわれは西洋文明をうけいれた。西洋文明じたいは悪いものではないが、植民地支配の過酷さによって、われわれは必要としないものまで必要とせざるをえなくなった。すなわちわれわれの民族 *kebangsaan* の独自性に災難が与えられたのだ。言語は民族に固有 *peribadi kebangsaan* のもので、「言語は民族の精神」というスローガンのとおりである。植民地支配者によって言語は、これ以上発展することのない古代的古典的なものとして守られた。われわれの生活と思考法における民族の固有性の要素は壊れた。われわれは弱い民族となり、統一をはたしてみずからの民族的独自性の上に立とうという信念を持てなかった。("Rencana Pengarang" September 1957:9)

上の文章から読みとれるように、「民族」的な固有性は、植民地主義によって古典的なものとして保護され、その結果、生きて成長するものではなくなってしまった。それでは、植民地主義によって破壊され、喪失した「民族性」を回復するためにはどうしたらよいのだろうか。そこで、「民族語」を学ぶことをとおして、「民族」的な「主体」が未来へ向かって制作されるものとして構想されることになる。

独立したわれわれにとって、民族の独自性を守るのは重要な責務である。もっとも重要なのは、言語運動をすることである。これによって、人民 *rakyat* が全階層、全集団 *golongan* において、その精神のなかで生存し成長していく民族的要素が与えられるのである。("Rencana Pengarang" September 1957:10)

この編集記において「われわれ」や「民族性」などの言葉で指示されているなかから、マジョリティであるマレー系住民以外のマラヤ住民は暗黙のうちに排除され

ている。つまり「植民地支配によって西洋文明をうけいれたわれわれ」はじつのところマレー系住民であり、「災難を与えられたわれわれの民族性」は「われわれマレー人」の民族性なのである。また、「独立したわれわれにとって、民族の固有性を守るのが重要である」というときにも、「われわれマレー人」が念頭に置かれている。「われわれマレー人」以外のマラヤの住民は、「植民地の結果」もたらされたある種の災難である。「植民地の結果」は長く困難ではあっても「破壊」されなければならない。植民地主義による災難を解決するプロジェクトが、全階層、全〔民族〕集団をふくむ「人民 rakyat」によってなされる言語運動という実践である。ここで、人民すべてが国民語を獲得することをとおして、マラヤの国民性が事後的に獲得されることが指摘される。すなわち、植民地主義の結果である災難としての《ブルーラル・ソサエティ》状況を超克するのは、「マレー語」を学ぶことと「マレー的なもの」へ同化することをとおしてである。同様のことは、独立の翌年の編集記においても読みとれる。

われわれにとって不可欠なのは、国民語への愛の精神をこの国の人々すべてに植えつけることである。さらにその責務をはたすためにこの言葉をすべての分野にとってふさわしいものとするための努力を怠ってはならない。何百年も抑圧されつづけた国民語を価値づけ、愛し、学ぶ精神には、何倍もの力と強い魂が必要である。("Rencana Pengarang" Jun 1958:271)。

「われわれマレー人」が、「非マレー人」をふくむこの国の人々のすべてに、「マレー語」の愛の精神を植えつける、という。「われわれマレー人」とわれわれ以外のマラヤのすべての人民が、抑圧され失われた「われわれマレー人」の「民族性」を、国民語としての「マレー語」を学ぶことをとおして獲得すること。そのことが、欠如した国民的「主体」を回復することになる、というぐあいである。

ASAS'50による独立以前の国民にかんする構想では、失われた雑種的でコスモポリタンな過去を未来へ向かってとりもどすことが試みられ、「マレー語」は、「マレー人」の民族語というよりは、もともとコスモポリタンな「マレー世界」におけるリング・フランカと考えられていた。しかしながら独立後の『デワン・バハッサ』

誌では、植民地主義によってもたらされたのは、「われわれマレー人」の民族性を危機に陥らせる「移民」社会の並存という《ブルーラル・ソサエティ》的状况である。この状況を超克するのは、「われわれマレー人」が、失われた「われわれマレー人」の共同性を未来へ向かってとりもどすことである。マラヤにおける「われわれマレー人」以外の人々も、この作業に参加することが要請される。ここにおける国民のイメージは、ばらばらの諸「民族」集団が平等に溶解していく「るつぼ」ではなく、「この国」と有機的に結びついた「マレー的なもの」への同化である。

2 マレー的なものへの同化

『デワン・バハッサ』誌の論者らにとって、「マレー的なもの」はマラヤの土地とむすびついた自然なものとされる。そのため、マレー語が国民語としてふさわしい理由を説明することはもはや必要ないかのようである。

今日にいたるまで、なぜマレー語が国民語となったのかを説明するのは、マラヤの国民の半分には重要なことのようにだ。マレー語を国民語としたことにより、マレー人がよりたくさんの特権を享受することになるというような意見を聞くと、人々 *rakyat* は混乱する。こうした説明により、つぎのような訴えがでてくる。マレー語を国民語とすることで、非マレー人の言語ははしのほうへ追いやられ、かれらの文化は滅ぼされてしまうのでは、と。これは政治的な問題であるが、われわれとしては政治的討論に荷担するわけではない。この雑誌は、言語と文学の雑誌であり、「言語は国民の精神」であり、国民語は「国民 *bangsa* の精神」であるという希望を実現させるものである。マレー語が国民語となったのは、マレー人の特権を守るためでもなく、非マレー人の文化を壊すためでもない。われわれはすでに気づいているはずである。独立した国において英語を公用語として使用するのには終わりにすべきであると。英語の使用は強制されたものであった。一つの国民 *bangsa* としてやっと独立したわれわれは、国民性 *kebangsaan* を束ねる道具をもたなければならぬことに気づいた。この国における英語の地位は、植民地支配当時のように

最高の地位ではないことに気づいた。そうした意識によってわれわれはマレー語が国民語の地位にあることに気づいた。("Rencana Pengarang" Mei 1958:216-217)

ここで編集者は、「マレー語」が国民語であるべき理由や、「非マレー語」の地位がどのように変化するかについてはなにも述べない。そのような疑問はすべて保留して、有無をいわずに、「マレー語」が国民語であるということに「われわれは気づいた」という。この「気づいた」という言い方によって、「マレー語」の国民語化を、論争の必要性のないあるべき自然な状態としてしまうのである。それでも不満を持つ人々（=かれら）は、下で示されるように「われわれ」国民にとって狭小な自己中心主義とされる。

マレー語よりも国民語に適した言語をだれも見つけることはできないだろう。あるのは、マレー語が国民語となったら、非マレーの（中国やタミル）の言語は、はしに追いやられるのではという不信を示す自民族中心主義的 kaum な文句である。("Rencana Pengarang" Mei 1958:217-218)

これは同化主義の典型的な論理であるともいえよう。ここでは、「多文化主義」的な考え方はほとんど見受けられない。「マレー的なもの」の主張は当然で国民的である一方で、他の民族的なものを主張することは狂信的な自民族中心主義とされてしまうのである。

このように、マラヤの国民化は、「るつぼ」でも「多文化主義」的なものでもなく、マレー的なものへの同化をとおして構想されているのである。このことは、以下にみられる、新しく形成されるだろうマラヤの国民文化についても共通している。

マラヤ連邦の国民語としてマレー語が受け入れられるということは、この国の国民文化の基盤を探すという夢にも結びつく。[中略] 独立の時代におけるマラヤ国民文化の土台として受け入れられうる文化という可能性にマレー

文化を結びつけることなくマラヤ文化を語るならば、「国民的な national」ものをかたちづくる成果がもたらされることはないだろう。〔中略〕上記にたいしてもちあがる問題がある。というのも、やっと独立したマラヤ連邦は、それぞれ独自の文化をもつ、さまざまな系統の民族によって成立しているからだ。それらの文化は先祖からの遺産なので、それらの民族kaum dan bangsaの文化を捨て、ちがう文化を身につけよと強制するのは難しい。この国において、さまざまな文化と生き方が合流するだろう。マレー、中国、インドのあいだにおいてだけでなく、西洋文明とのあいだにおいてもである。われわれが国民文化の基盤を探さなければならない理由は、この基盤の存在によってのみ、この国のさまざまな民族kaumによる文化変容socializationの発展をナショナルなかたちの文化形成へと進めることができるからだ。このナショナルな文化は、この国のある文化による他の文化の抑圧を必要とするものではない。〔中略〕マレー文化が国民文化の諸基盤として適しているならば、マラヤ連邦における文化変容の側面について深く考慮する必要がある。抑圧である文化的同化culturizationは健やかな国民文化を招かない。マレー文化がマラヤの国民文化の諸基盤となるという可能性は強い。しかしその実践はさまざまな系統からのさまざまな文化によるわれわれの社会における文化変容の側面からなされなければならない。そして植民地支配のときのような同化であってはならない。マレー文化を国民文化の基礎として受容することは、マレー語を国民語として受容することと同様である。以前のように公用語として英語を受容することではない。この国の子供たちを抑圧する西洋文明を受容するのとは異なるのである。("Rencana Pengarang" Januari 1958:5-7)

各民族の文化が合流してできる新しい国民文化は、「マレー文化」にもとづいているものであるが、西洋による植民地主義的支配によってもたらされた抑圧的な同化ではないという。『デワン・バハッサ』の論者たちは、英語を諸民族の伝達語としたうえで諸民族の言語を併存させるという「多文化主義」的な要求、もしくは、「マレー語」を国民語としたうえで「中国語」や「タミル語」を公用語とするという譲歩案ですら、狂信的自民族中心主義であると断罪する。そのうえで、「マレー

語」を国民語として使用するという日々の実践をとおして、自発的に「マレー的なもの」へ同化することが要請されるのである。

第3節 「マラヤ」を越える

前節では独立前後の時期における、マジョリティである「マレー人」の、とりわけ保守層によって抱かれたマラヤ国民のイメージについて、国民語にまつわる議論から検討してきた。ここでは、独立の前後をとおして、独立マラヤの領土的範囲と重なるマレー半島を空間的な単位とした《プルーラル・ソサエティ》という考え方が前提となっていることが明らかになった。マレー系の保守層であっても、独立以前と独立以降では「マレー語」を国民語とすることでは共通していたが、《プルーラル・ソサエティ》の他の構成民族のあつかいについてちがいがあった。ASAS'50による独立前の議論には、これまでになかった《プルーラル・ソサエティ》という国家的な枠組みと「民族的なもの」をどのようにつきあわせて新たな国民国家の構想をうちたてるかの苦難が見受けられた。そこでかれらは、「マレー語」を徹底的に道具としてみなし、「マレー語」と「マレー人」の必然的な結びつきを強調する「精神」などの言い回しを避けるという戦略を立てていくのである。

しかしながら、独立後に創刊される『デワン・バハッサ』誌では、「精神」という言葉が積極的に使用されるようになる。ただしこの「精神」は、あらかじめ与えられているものではなく、植民地主義によって奪われ、失われてしまったものである。さらに、「非マレー人」にとっても「マレー人」にとっても、「マレー語」をあらためて学ぶということによってのみ獲得できるものと考えられた。「マレー人」と「非マレー人」が「マレー語」を実践的に使うことで、「マラヤ的なもの」をえることができる、というのである("Rencana Pengarang" Mei 1958: 218)。ここでは、「マレー的なもの」はマラヤという空間とむすびついた自然なものと考えられ、マラヤにおいて「マレー文化」に認められる「普遍性」は他の「民族の文化」には認められないばかりか、「マレー文化」以外を強調することは偏狭な自民族中心主義とされてしまうのである。

マラヤにおける国民的な「主体」は植民地主義がもたらした災難としての《プルー

ラル・ソサエティ》的状况を乗り越えることで構想された。ASAS'50と『デワン・バハッサ』誌のいずれにおいても、植民地主義を批判しつつも、《植民政策学》がおしすすめたマレー半島という空間と《地域研究》的な知の枠組みである《プルーラル・ソサエティ》を前提として、そこから「国民的主体」を構想せざるをえなかったのである。

しかしながら、第3章において見てきたような植民地の領域とは異なるひろがりをもった「マレー的なもの」の構想は、《植民政策学》と《地域研究》のからみあいのなかですっかり抑圧されてしまったわけではなかった。第3章で検討したザッバはマラヤ独立後においても『デワン・バハッサ』誌に論文を精力的に発表している。そこでは、マラヤにおける《プルーラル・ソサエティ》的状况をマラヤという空間を乗り越えることで超克しようとする構想がうかがえる。これはじつのところ「マレー人」左派の主張にも結びついてくものでもあり⁹⁾、マラヤとインドネシアの合同を中心とした「マレー民族」による「大マレー」ないしは「大インドネシア」結成を思い描くものであった。かれはマラヤにおける「非マレー人」の問題にはほとんど関心を向けず(Za'ba1957:24)、かわりにかつては「同一」であったはずの「インドネシア語」とマラヤの「マレー語」の統合の問題に心を砕く(Za'ba1956,1957)。このときのザッバの目前にあったのは、《プルーラル・ソサエティ》状况をマラヤという植民地的空間を解体することによって乗り越えた、マレー諸島地域を包括する「マレー人」の共同体である。このような構想は、政治的な統一のくわだてがうち砕かれてしまったあとも、イスマイル・フセインらが掲げる「マレー世界」にみられるような文化的な構想として生きのびていくことになる。この構想は、《植民政策学》と《地域研究》とのからまりあいのなかから生みだされた植民地の領域をそのままうけつぐ国民国家的な空間を乗り越えようとするところみである。しかしながら、そのようなところみも、ある特定の空間との内在的で必然的な関係を前提とした「地域」を出発点としている以上、国民国家的なものとはまったく異なる原理によって成り立っているわけではない。

《植民政策学》のオリエンタリズム的なまなざしを内面化した「マレー的なもの

⁹⁾マレー人左派の思想についてはAriffin (1993)を参照のこと。

の喪失への危機」という感覚は、アブドゥッラーやザッバによる「現地」の「マレー研究」を生みだした。19世紀と20世紀はじめにおけるマレー論は、空間的には植民地の領域をこえた範囲を構想していたが、第二次世界大戦後には《植民政策学》によってしだいに形づくられたマレー半島という空間をみずからのものとしていくようになる。そこでは、「民族的なもの」と国家的な領域を重ねあわして国民国家を構築することがめざされた。本章においてみてきたように、マレー半島という空間は、第二次世界大戦後には《プルーラル・ソサエティ》としてみなされていた。この現状認識は、イギリスを中心とした《植民政策学》と、第二次世界大戦から戦後の冷戦期にかけて展開するアメリカ合衆国を中心とした《地域研究》とのからまりと重なりの中からは生みだされてきたものであった。そこでつぎの章から、戦後の《地域研究》とそれとの関係で新しくつくりだされる「現地」の研究についてみていくことにしよう。